



# 鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第125号

2023年9月1日

## 11月18日・19日に社叢インストラクター養成セミナーと資格認定試験 18日の2講座は関西定例研究会と共催

社叢インストラクター養成セミナーを下記の通り開催する。今回も社叢インストラクター養成セミナーと同時に資格認定試験を実施する。受験資格は今回も含めたセミナー受講者もしくは技術士・樹木医・森林インストラクターなど、社叢学会が認めた資格の保持者。

なお18日(土)午後の武田義明理事による講義とフィールド観察と森本幸裕副理事長による講義は、関西定例研究会との共催で、一般の会員も参加が可能。

セミナーの受講料は、正・協力・賛助会員は15,000円、

市民会員は17,000円。申込者が3人に満たない場合は中止する。

申込用紙は社叢学会ホームページ(<http://www.shasou.org/inst/ent.pdf>)に掲載しているので必要事項を記入の上、郵送されたい(mail不可)。申し込み締め切りは11月6日(月)必着。

なお、資格認定試験出願者は、受験料として5,000円を申し受ける。

11月18日(土)吉志部神社(吹田市)

10:00~10:20	ガイダンス：前迫ゆり
10:20~10:25	挨拶：奥田哲夫・吉志部神社宮司
10:25~11:15	実習：事前授業、樹木・社叢実習 武田義明
11:20~12:20	講義：地域のよりどころとなる社叢 上甫木昭春
13:00~14:20	フィールド観察と講演：吉志部神社の社叢を含む紫金山公園の里山管理 武田義明
14:40~15:15	講義：社叢の保全とOECM登録 森本幸裕
15:15~16:00	総括 前迫ゆり

11月19日(日)伏見稲荷大社(京都市伏見区)

10:00~11:30	社叢フィールド観察：樹木実習・森林構造と管理について 前迫ゆり・武田義明
11:40~12:00	講義：フィールドのまとめ等
12:50~14:10	講義：祭事に使う植物 渡辺弘之
14:15~	閉講の挨拶 前迫ゆり
14:30~16:00	社叢インストラクター資格認定試験

## 次回予告【第91回関西定例研究会】

- ◆日 時：10月4日(水) 13:30~16:00 **！曜日にご注意ください！**
- ◆場 所：梅小路公園「緑の館」イベント室(京都市下京区観喜寺町56-3)
- ◆テ ー マ：<OECM>30 by 30と社叢の役割  
梅小路公園「藤袴と秋の和の花展」「いのちの森」見学・解説
- ◆講 師：徳丸 久衛(環境省近畿地方環境事務所)
- ◆コメンテータ：森本 幸裕(社叢学会副理事長・京都大学名誉教授)
- ◆参加費：200円(朱雀の庭入場料)



## 俳人 小林一茶と江戸の園芸文化

—社叢の園芸学：梅・桜・菊—

講 師：賀来 宏和(社叢学会理事・千葉大学大学院園芸学研究科客員教授)

本年3月に賀来氏は、大著『一茶繚乱—俳人 小林一茶と江戸の園芸文化』を八阪書房より出版された。その機会をとらえた記念講演という意味あいも含んだ定例研究会での講演であった。

### ● 世界に誇る 江戸の庶民園芸

江戸時代300年の泰平のなか、さまざまな芸術文化が大きく発展した。特筆すべきは園芸や花作り、「生け花」の興隆であった。草花愛好ブームから、梅、椿、牡丹などの花木、橘、万年青、菊、朝顔などの栽培、品種改良が行なわれ、多くの園芸書が出版されたという。上下卑賤を問わず、庶民層に至るまで、花作りに情熱を傾けた江戸の人びとにより、日本の園芸は江戸時代に独自の展開をとげ、当時の世界トップレベルにまで発展した。それも、他の国々では見向きもされなかった野草が次々に園芸品化されるとともに、江戸時代中期以降は斑入りなどの草花の変異が珍重され、変化朝顔が流行するなど、世界にも例のない方向に発展した。そして、一方で、異国の草木が次々に渡来し、江戸時代の園芸は隆盛をきわめ、庭園のような江戸の町の美しさに、幕末期日本を訪れた外国人たちを驚愕させた。西洋のガーデニングのルーツは江戸にあった。

### ● 江戸の園芸文化の神髄を小林一茶の発句を分析

小林一茶の残した二万句に及ぶ発句は、当時、世界最高の水準にあったわが国の園芸文化が成熟期を迎え、庶民の間にも園芸が大流行していた様子を如実に物語っている。

賀来氏は「梅」「桜」「朝顔」「菊」など四季折々の観賞植物ごとに発句をまとめた。『一茶全集』(信濃毎日新聞社刊)の第一巻『発句』の収載句、凡そ18,700句の中で、「新年」及び「春夏秋冬」並びにどれにも分類されていない「雑」に含まれる植物関係の季題は209季題(傍題も含めて一季題として)。

植物関係季題に相当する発句は4,413句(凡そ1/4)で、同一品目の植物で季節によって表現が異なる季題は統合する。例えば、「梅(春)」「梅の実(夏)」「冬梅(冬)」→「梅」という品目とすると、以下のような

量的順となる。

第1位 「梅」 = 421句

第2位 「花」 = 376句

第3位 「桜」 = 345句

第4位 「菊」 = 269句

第5位 「朝顔」 = 159句

※「花」は主として「桜」を示すので、合算すると、桜・梅・菊・朝顔の順となる。これは、当時の庶民の季節による四大花見の植物である。

梅、桜・花、菊について、栽培・改良の歴史、担い手、鑑賞などについて細かな分析と説明がなされた。詳しくは賀来氏の大著を参考にされたい。

### ● 『一茶繚乱—俳人 小林一茶と江戸の園芸文化』(賀来宏和著)の構成

- ・小林一茶の生きた時代
- ・日本の園芸文化と江戸園芸に至る道
- ・江戸に華ひらく
- ・一茶と花の時代
- ・梅と一茶
- ・一茶と春の園芸植物  
福寿草のこと／椿のこと／桃のこと／桜草のこと／蒲公英のこと／藤のこと／躑躅のこと
- ・桜と一茶
- ・一茶と夏の園芸植物  
牡丹と芍薬のこと／花菖蒲と杜若のこと／花蓮のこと／撫子のこと／石菖のこと
- ・朝顔と一茶
- ・一茶と秋の園芸植物  
蘭の花のこと／楓のこと／金のなる木のこと
- ・菊と一茶

の順に構成されている。

年度初めの定例研究会でもあり、44枚ものスライドを投影しての講演であった。学生、市民の他、賀来氏の専門分野である造園学関係者、俳人仲間ともしき参加者もあり、いつになく賑った研究会であった。

(文責 渡邊節子)

## 次回予告【第89回関東定例研究会】

- ◆日 時：9月30日(土) 12:30 埼玉高速鉄道戸塚安行駅集合  
18:00頃 埼玉高速鉄道新井宿駅解散
- ◆場 所：川口市安行(植木のまち)
- ◆テマ：「植木のまちの歴史と文化」見学会
- ◆解 説：植木のまち安行を調査してきた研究者



## 受け継がれる狂言の心

講 師：三浦 裕子(武蔵野大学教授・同大学能楽資料センター長)

今回は共催のポーラ伝統文化振興財団の50作目の記録映画の上映に合わせて、「狂言の魅力を知る-映画『野村万作から、萬斎、裕基へ』をより楽しむために」と題してご講演いただいた。能や狂言が行われる舞台というと、シンプルな作りの空間と、描かれた老松が印象的だ。季節や情景は台詞や謡(歌)で表現され、書割のような大道具は無い。狂言の魅力とは、その世界を覗いてみたい。

## ● 狂言とは

狂言は室町時代に芸術的な基礎を固めた喜劇である。台詞は古い日本語でできており、当時の習慣や思想が根底に流れ、全く異なった文化をもった人々を見る感覚に陥ることがある。一方で私たちと共通する何かを発見することもある。これは狂言が人間の持つ普遍性を取り上げているからであろう。古い時代のものでありながら、現代に生きる私達にも大いに共感することができる。

狂言の始まりは「猿楽」という芸能である。奈良時代に散楽(雑多な芸能の集合体)が唐より伝来し、日本古来の滑稽な芸能である俳優(わざおぎ)と融合して、平安時代中期に猿楽と名称および形態を変えた。当時の猿楽は滑稽な寸劇を代表芸としており、現在の狂言の原型と言われる。のちに歌舞的要素を獲得し、歌と舞を取り入れた猿楽は、鎌倉時代中期に狂言と能に分化していく。能は音楽と舞踊で表現される一種のミュージカルであり仮面劇である。狂言は素面に対話を中心とする台詞劇である。分化したとはいえ、兄弟のような密接関係を保ちながら、互いに協力して生きてきた。能と狂言が併演されることや、能の中に狂言の演者が参加することなどはそれを証明するものである。

## ● 太郎冠者とは

狂言には、和泉流と、大蔵流の二流がある。この

後ご覧いただく野村万作氏は、和泉流で人間国宝である。現在狂言のレパートリーはこの二流を合わせ263曲(和泉流のみの所演曲63、大蔵流のみの所演曲9、共通演目191曲)があり、その中で太郎冠者というキャラクターが約100曲に登場し、半数の約50曲でシテ(主役)をつとめる。太郎冠者は狂言を代表するヒーローである。100曲に登場する太郎冠者はそれぞれ別人格と考えられるが、共通点もある。「太郎」は長男に用いる名称、「冠者」は本来元服し冠をつけた者という意味であるが、狂言では主人に使える筆頭家来を意味する。しかしながら、現代でいう上司と部下の関係では無い。主人にとって太郎冠者は財産でもあり、大切にしている。太郎冠者は明るくたくましく、真面目に生きているが、時に仕事を怠け、主人をからかうこともある。このように太郎冠者が行動するのは、努力次第で主人の身分に成り上がることができる中世の世相が背景にあるからではないかと言われる。

## ● このあたりの者でござる

狂言は「このあたりの者でござる。」という台詞から始まる。名前もわからない、固有名詞を使わず、場所も特定しない。私たちの身近な存在として狂言を鑑賞できる工夫がある。野村萬斎氏が雑誌のインタビューで語っていたことを引用すると、例えば宇宙船から地球を見ると、地球は丸く見えるわけだが、そこからズームしていくと、たまたま1人の人間がいる。この人を中心にして物を語るのである。そこにいる人は誰でもこのあたりの人である。one of このあたり、である。位が高いとか、低いとかは関係ない。平等感があり、人間の普遍性を取りあげているようにも思える。

(文責 渡邊 節子)

## 次回予告【第90回関東定例研究会】

- ◆日 時：10月21日(土) 14:00～
- ◆場 所：秩父神社 参集殿
- ◆テ ー マ：かいこがつむぐ新しい地場産業
- ◆講 師：長島 孝行(東京農業大学教授)
- ◆共 催：NPO法人社叢学会／公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団／國學院大學  
環境教育研究プロジェクト／埼玉絹文化研究会／JAちちぶ養蚕部会

ご注意ください!

## 関東支部の電話を排しました。 定例研究会等のお問い合わせは本部事務局に!!

お電話は月水金曜日10時～15時ごろにお願いいたします。  
不在の時は、留守電・faxをご利用ください。

book book book book book book

琉球の祭祀植物の研究

新里 孝和 著  
むぎ社 定価3,000円+税

沖縄やんばるに生まれ育ち、琉球大学で林学を修め、その後、国頭の与那演習林に長く勤務してきた著者が、国指定重要無形民俗文化財「安田シヌグ」に興味を惹かれ、祭祀植物に言及されている先行研究がほとんどないことから始めた探究は、やがて沖縄各地の祭祀植物の研究に発展していく。さらにこれらの植物の民俗学的意味・意義に視野が広がっていく。まさに社叢学会が目指すべき研究ではないだろうか。

筆者が京都大学で学位研究をした折に指導した渡辺弘之・本学会顧問が寄せた「推薦の言葉」では、方言がわかること、植物分類に十分な知識を持つことを、こうした研究の必須条件としてあげているが、著者以上の適任はおるまい。

植物を飾る正装で祈り、踊る人々の姿を写した口絵写真も楽しい。気候変動にさらされる今、いつまでもこうした植物が祀りを彩ることができる地球であることを祈らずにはいられない。

## 事務局から

- 下記の通り、『社叢学研究』22号への投稿を募集しています。研究者の業績評価にもつながりますので、ぜひご投稿ください。論文には至らない準備段階の研究ノートや、短報、身近な活

動、社叢の訪問記(紀行文)もお待ちしています。学術論文としての体裁を整えるための書き方や、引用文献、参考文献の扱い、記載の仕方については社叢学会のホームページに公開しています(<http://www.shasou.org/journal/format.pdf>)。お目通し下さい。

- 10/4開催の関西定例研究会は、特に社叢に関わる神社関係者や社叢インストラクターの方にご参加いただきたく存じます。神社関係者にはOECMをご理解いただいた上で、社叢を多様性ある森として認定する際にご協力いただきたく、また社叢インストラクターには、社叢の生物多様性を判定する役割を果たしていただくための枠組みを検討しており、この施策への理解をより深めていただきたいと考えています。
- 今年度より、会員証はご希望の方のみにお送りすることとなっております。ご希望の節は、お手数ですが事務局にご一報ください。

## 編集後記

植物に優劣はないと。ならばなぜに?! ヘクソカズラとか、ハキダメギクとか、そんな情けない名前をつけるのか?! 身も蓋もないではないの。ってかハキダメギクは牧野センセイの命名って?! てなことをぼやいていると、今度はノラクラミミズというのを見つけてしまった! もお! ミミズってさ、のらくらしているように見えるけれど、逃げ足は意外に早いのを知らんな? いずれにせよ、もう少し風雅な名前をお考えいただきたい。ところでニイニイゼミとかミンミンゼミってのも、名前としては些か安易ではないかい? (藤岡 郁)

## 掲 示 板

## 『原稿募集!』

『社叢学研究』第22号への投稿:論文、研究ノート、短報、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)と「鎮守の森の活動報告(祭、音楽会、調査、ワークショップなどの実施報告、抱える問題点など)」「社叢訪問記」(各1,200字程度)を募集いたします。締め切りは、論文等10月30日(月) 活動報告等12月22日(金) いずれも必着。

\* 書評欄では会員の皆さまの著作を取り上げています。出版された方は、ぜひご献本下さい。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号  
TEL・FAX 075-212-2973  
URL <http://www.shasou.org> E-Mail [shasou@ams.odn.ne.jp](mailto:shasou@ams.odn.ne.jp)